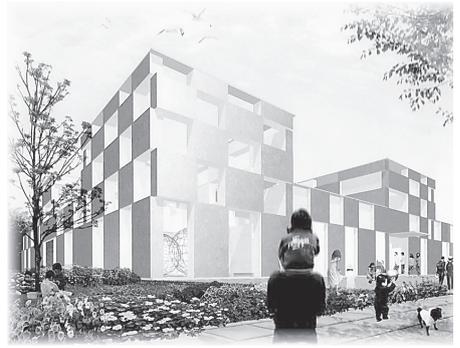


予科練平和記念館だより

平成22年2月開館



予科練平和記念館整備推進室では、予科練や海軍、町の歴史に関する資料、体験談などを収集しています。ご存じの人はぜひご一報ください

あちこちから夏祭りのニュースが聞こえる季節になりました。8月1日2日には『まい・あみ・まつり』が開催されますが、これが終わるころ、遠く青森ではねぶた祭りが始まります。勇壮な武者絵の張り子をひきまわす、東北三大祭の一つとして知られているものです。日が落ちるころ、明かりを入れられたねぶたは、まるで目を覚ましたかのように大勢の観客が見守る中生き生きと市中へ繰り出します。「血がじゃわめぐ(騒ぎ出す)」と言われるお囃子が何百何千のハネトと呼ばれる踊り手を熱狂させ、沿道の観客も巻き込んで、エネルギーの渦のような熱が短い東北の夏を輝かせます。夏の楽しさは祭りの楽しさに似ているなど思う今日このごろ、皆さんはいかがお過ごしでしょうか。

●予科練習生たちの今

6月に元予科練習生だった人にお話をうかがってその様子を撮影しました。皆さん傘寿を迎えられてますがお元気で、背筋を伸ばしてかくしゃくとしていらつしやる様子はさすがという感じでした。

松田(二川)政雄さん(85)は、飛行機乗りになりたくて昭和12(1937)年、15才の時

に乙第12期予科練習生として霞ヶ浦海軍航空隊飛行予科練習部に入りました。卒業後はラバウルやグアムなど南方の激戦地で任務につき、自分の乗った飛行機がアメリカのB25に攻撃され、危機一髪命をながらえた経験をお持ちです。戦後は茨城県庁の職員として県政に尽くされました。南方の戦地でパンの木を自分で削って作ったはんこが、今も残る戦地での唯一の思い出の品だそうです。

宮本道治さん(82)は幼いころに父親を亡くし、母一人子一人で育ちました。工業学校2年生のとき、母親が大きな手術をしたため、これ以上経済的な負担をかけたくないと思って、昭和18(1943)年16才のときに土浦海軍航空隊に入隊したそうです。在隊中には予科練の名を一躍有名にした映画「決戦の大空へ」のロケがあり、宮本さんもエキストラとして参加したそう



▲撮影準備中の松田さん

です。終戦後は警察官となり、戦時中の経験をまとめた本を何冊も執筆なさっています。濱中榮次さん(82)は敗戦の色が濃くなった昭和19(1944)年、国の役に立ちたいと17才で予科練習生になりました。しかし卒業するころはもう飛行訓練ができなくなっており、同期の予科練習生たちとともに陸上攻撃の特攻部隊に編成されました。移動中の電車のなかで終戦を迎え、解散のとき落胆している濱中さんたちに向かつて、引率として日本再建に尽くしてくれ。

これからの君たちの仕事はあるのだ」と述べたことを話してくださると、濱中さんの声は詰まりました。復員してからは大学に入学して中学校の教師となり、青少年の教育に力をそそがれました。

畠山昭一郎さん(82)は私立東京中学4年生のときに予科練を受験、昭和18(1943)年に17才で三重海軍航空隊(三重県津市)に入隊しました。海軍では自分より他人を考えるのが大切なことで、同期生の絆がとても強かったそうです。終戦は元山(現北朝鮮)で迎え、日本に帰ってからは大学に入学して警察予備隊(自衛隊)に入隊、現在は阿見町内にお住まいで陸上自衛隊武器学校内の

予科練記念館「雄翔館」館長として活躍されています。若い人たちへのメッセージとして、自分のなすべきことを考えてほしい、という言葉を送っていました。

仲川(野口)武男さん(80)は、昭和18(1943)年14歳のときに乙第20期予科練習生として土浦海軍航空隊に入隊、まだ体が小さくて支給された軍服がぶかぶかだったそうです。年上に混じった訓練はとても厳しかったけれど、適性飛行で飛行機に乗れたことが忘れられない思い出だそうです。倉敷で機雷棒を持って敵の戦車に飛び込む訓練をしたり松根油作りをしていたころ、広島に原爆が投下されたところを目撃、終戦時はまだ16才でした。その後土浦海軍航空隊跡にできた日本体育専門学校(現日本体育大学)に入学、卒業後は体育教師として長く活躍され、朝日中学校の初代校長となられました。

インタビュの内容を少しご紹介しましたが、一口に予科練習生と言ってもさまざま進路や状況だったことが見えてくると思います。お忙しい中貴重なお話を聞かせてくださった5人の皆さん、本当にありがとうございます。今回撮影した映像は、予科練平和記念館の資料として永く保存活用させていただきます。